

～オンラインイベント『幕恋12.5周年祭 今年じゅうに!祝わせて!!』記念～

※以蔵ルート、月の終幕後の主人公サイドのシリーズ、特殊エディション。

(まだ pixiv 等にひっばってきてない辺りのネタもはいています)

…… + …… 平助くんの、多分、月の終幕のずっと未来の話、というのがありまして、絡めてみた。

「知らんわー」って方は、漠然と、雰囲気…… (ゴメンナサイ)

記念品的に、楽しんで頂けたら幸いです。

りゅうま げん 龍魔 幻 (りゅうま) / げんそうぶんがくしゃ 幻創文楽舎

<https://role-r.com/> Twitter : @genryuma

「へえ、面白い。あたしもちよつと欲しいなあ、それ」  
そう言ったのは、あの彼女、ではない。カナコさんでもない。

昔々の伝承だか歴史だかの上の人物岡田以蔵と同じ名前をつけられた俺の、遠縁の女……

「おねえさん、つて呼びなさい」

……という人物である。最近、藤堂なる彼氏未満、  
ができたらしい。

このオネエサマの彼氏未満は、かの新撰組の藤堂平助が、ひっそりと生き残った後の子孫である、という疑惑がある、というのルーツを調べていて、大学で出会った、らしい。

ほんの少し前なら、それどころか、俺の実家の本家が、その時代の岡田以蔵の子孫である、という、話もまとめて、鼻先で笑い飛ばす、どころではない、子供の頃から何度か聞いたことがあったはずだが、ことごとく、右から左どころか頭上を飛び越えて、全く記憶にとどめてもいなかったのだが。

「うわつ。岡田さんのイトコの……」

「あー、以蔵でいいです、ややこしいし」

「そう？ えつと、以蔵くん？ 俺、藤堂平助のキャラが動かしやすい。格闘ゲーム、あんまり得意じゃないんだけど、けつこう意外」

「……また、新幽霊かなあ」

一つの出会いで少し意識をし、もうひとつの要員から、笑い飛ばす、どころではなくってきたのである。

実家、京都のへんぴで寂れた神社で、一人の少女と出会った。

それこそ、奇妙な話ではあるが、彼女は、明治直前の時代に飛ばされて、戻ってきたのだと言った。そして、俺は、そこで彼女が出会った、岡田以蔵の生まれ変わりのようだ、と。

俺は剣豪ではない、プログラマー志望の学生だが、  
どうも、そこではない要因で、らしい。

最初は、ちよつとした遊びだった。が、

「おい。スマホのペーターちゃんが呼んでるぞ」

剣豪、かともかく、実家の本家の剣道場を継ぐ、このオネエサマが、俺のスマホを興味津々で突き倒している。

「メール？」

「……じゃ、ないっぽい」

「じゃあ、オネエサマが遊んでやれよ」

この、ペーターである。ちよつとした遊び半分で、彼女の言うその時代の人物から、岡田以蔵の師匠だった、という武市半平太をモデルに、お遊びで、簡単なメールソフトとゲームの半ば、という感じで、キャラクターがメールを運んでくる、という、携帯アプリケーションを作ってみた、のだが。

「ええと……あった。はい、ペーターちゃん、おやつよ」

こいつ、プログラミングしていないことで動くのであ

る。挙げ句、たまーにいらんメッセージを吐くわ、追加してみたら、こうして、プログラム上とはいえ、かなり好き勝手に動く。

「どれだけ精査しても、そんなバグはない。バグでここまで動かれたら、それはそれで事件ではある。」

「おお。おやつ食べたら運動、っていうか、コレ、剣のお稽古かな」

「……だから、俺のプログラミングとは無関係で動いてるから、知らん」

もう、どうしようもない。コレは、俺の前世の師匠の幽霊だと思っことにした。

そして。

携帯からスマートフォンに移行したとき、この師匠らしきペーターは、しつかりと、スマートフォンに引越してきた。

もう、さ。割り切った方が、楽だと思う。

半分ヤケ、半分はもう、楽しむしかない。

今、オネエサマが連れてきた藤堂さんがやっているゲームも、彼女の言う人物たちをモデルにして組んだキヤクターの格闘ゲームである。もつとも、彼女やその親友のカナコさんはこの手のゲームは苦手なようで、もつぱら、俺と、俺の幼なじみの中岡慎太が対戦することがほとんどだが……

「……え、ちよつと。桂、つて、木戸孝允!?! なんで包丁なげるの……つと、かわせたつ」

「だから。木戸じゃなくて、俺の彼女の想像上の、で

すから」

……藤堂さん、大ウケしながら、その格闘ゲームに馴染んでるし。

「あたしは、大久保利通がお茶飲んだらパワーアップするのが好きだなあ」

人のことを言えた義理ではないが。それでも、どいつもこいつも、と、いいなくなる。

「っていうか、こつち」

オネエサマがスマホを指した。

「いつぞ、売って見たらいいのに。案外、ウケるかもよ、メーラー」

「面倒だからやだ。あと、師匠モドキが分裂したり出張したりはないとおもうぞ」

「いや、そういうのは期待してないから。っていうか、彼は人格でしょ、認めてあげようよ」

「認めてなかったら、専用の菓子とか細工しねーよ」  
なかなか、珍妙なやりとりである。

「じゃあ、大久保とし……いや、大久保さん? 作ったら、お茶ほしがるんじゃない? 激渋だつて」

「つくらないし。ほんとにそつちまで奇行に走られたらイヤだろ……」

「じゃあ、せめて、中岡くん専用の中岡慎太郎と、私たち専用藤堂平助、ね」

「結局、そこにもつて行きたいだけだろ、あんた!」

「その通りです。ペーターちゃんみたいに藤堂君のところに来てくれたら、歴史的な謎がとけるじゃない」  
……プログラマーが知り合いにお気楽に無茶を言わ

れる、というのは、お約束、みたいな話はあるが。

「解けてたまるか! 俺のメーラーはお化け召還ソフトかよ?!?」

幽霊のため、というのは、さすがに聞いたことがない。俺は、ペーター一人で充分だ。

ゲームをし終えた藤堂さんが、くつくつと笑っている。「大丈夫、大丈夫。俺は、俺でちゃんと、研究としてやるから」

笑い崩れながら、そういう。あの、ぐにやぐにやした字を、研究で読める、っていうんだから、コノヒトもすごい人ではあると思う。

「……じゃあ、召還できなくていいから、こんなかんじのカワイイ、藤堂くんっぽいメーラー」

本家のオネエサマは、彼女やカナコさんが尊敬する、かなり強い剣道女子らしいが、それがふくれつ面をして、それを宥める文系の藤堂さん……俺の親戚がかなり面倒で、謝りたくなる。

「だつてさあ、ペーターちゃん、知らない、っていうんだもん」

「…………訊いたのかよ」

「メール方式で訊いたら、ちゃんとお返事してくれたんだから、律儀よねえ、あんたの前世のお師匠さん。あんたにもそういう可愛げがあったらなあ……」

……なくて結構。

あちこち、汚染してるなあ、師匠もどきのペーターのヤツ。

……

…… おしまい